2022.03.31

さようなら、わたしの霊長研

小嶋祥三

今日が京都大学霊長類研究所の最後の日だ。個人的な感想、感慨を述べる。

＊＊＊

わたしは 1972 年 1 月から 2003 年 3 月まで、28 歳から 59 歳まで、この研究所に在籍した。研究者としての大部分の時間を、この研究所で過ごしたことになる。わたしは同僚の教員やポストドク、大学院生からも多くのことを学び、研究者として成長させてもらったと感謝している。その間、所長もやり、霊長類研究に対する関心、期待は研究所を離れてからも続いていた。しかし、身近にいた二人の同僚の相次ぐ不正で、研究所は解体されてしまう。本当に残念だ。

京都大学の執行部は、倒産しそうな会社を整理するかのような手法で、研究所を解体したと思われる。大学や附置研究所は利益を追求する組織ではない。処分に際して、学問に対する配慮はあったのだろうか。山極前総長は何も語らず、湊総長が述べる処分の理由は、事実に基づかず、筋が通らない苦しい言い訳に聞こえる。社会・生態、形態・系統という、研究所創立の核になった学問領域を欠いた新しい組織は、総合的な霊長類研究を担っていけるのだろうか。

＊＊＊

2003 年にわたしは霊長研を退職し、犬山を離れた。その当時、わたしは妻が買ってきた小田和正の CD を聴いていた。CD の中には入っていなかったと思うが、わたしは『空が高すぎる』という曲が好きだった。以下が歌詞の一部である。

・・・・・・・

誰もが皆んな輝いていた
それぞれの笑顔で、それぞれの涙で

僕等はいつでも同じ夢を見てた
やがてここには
もう誰もいなくなる

・・・・・・・

室伏靖子先生（旧姓で）、浅野俊夫さん、井深（旧姓、渡辺）允子さん。皆さん、定年を迎えることなく、研究所を去っていった。わたしもそれにならって早めに研究所を去った。わたしが研究所を去ることにより、赴任した時の心理部門の教員は誰もいなくなった。この間、心理系は認知学習分野と思考言語分野になり、それぞれ正高と松沢が引き継いだ。わたしは二人が心理系を盛り立ててくれると思い、安心して研究所を離れた。

ところが、松沢の研究費の不正、正高の研究不正で、心理系の 2 つの分野はもとより、霊長類研究所がなくなってしまう。明日からは、もう誰もいなくなる。心理部門に所属したも

のとして、二人の上司として、とても残念に、そして申し訳なく思っている。二人の強すぎる私（我）が公を乗り越えてしまった、と思った。霊長研には、人格的に偏っていることを許容する大らかな面があったが、それが二人をモンスターにしてしまったかもしれないと思った。

＊＊＊

昔、霊長研でこんな会話があったことを思い出した。

わたし「サルでメシを喰うなんて、世の中の寄生虫みたいだな」。

松沢「いや、坑道のカナリヤだ。僕らが生きていけない社会はよくない社会だ」。

結局、生きていけなくなったのだが、社会のせいでなく、松沢自身が出した毒ガスで、彼も含め、皆がやられてしまった.....

＊＊＊

組織はなくなるが、多くの教員は犬山に残るようだ。全員が一層努力して業績を挙げ、霊長類研究所を再興することを期待している。